

地域活性化に資する「小さな拠点」デザイン ～土木遺産の再利用に関する一提案～

羽 野 暁¹

¹第一工業大学 講師 自然環境工学科 (〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央1-10-2)
E-mail: s-hano@daiichi-koudai.ac.jp

A Proposal on the Reuse of Civil Engineering Heritage for Regional Revitalization

Satoshi HANO¹

¹Lecturer, Dept. of Civil and Environmental Engineering, Daiichi Univ. Institute of Technology
(Kokubu-Chuo 1-10-2, Kirishima-shi, Kagoshima-ken 899-4395, Japan)
E-mail: s-hano@daiichi-koudai.ac.jp

Abstract : The regional depopulation is getting worse, and we have to tackle this problem. In local community, the organization and building of the "small bases" is effective approach for revitalization and organic growth. The historical concrete bridges, constructed in Taisho and early Showa periods, are removed in recent years. These concrete bridges which have characteristic decorative shapes can be a help of regional revitalization. In this paper, we report on the proposal on reuse of these concrete bridges for regional revitalization by case study on Yamadabashi bridge in Aira-Yamada area. As a result, we presented a plan of reuse the parapet of Yamadabashi bridge for public bench used by tourer, visitor, children, and elderly persons in this area for the "small bases".

Key Words : community design, local heritage, historic bridge, concrete parapet, organic growth, small bases

1. はじめに

少子高齢化が進む中、地域がそれぞれの特徴を活かし元気になる自律的成長（有機的成長）が求められている。内閣は、まち・ひと・しごと創生長期ビジョンの達成に向けて平成 27～31 年度の五か年総合戦略を立案しているが、「小さな拠点」（多世代交流・多機能型）の形成、地域間の連携・ネットワークの形成、既存ストックのマネジメント強化、文化・芸術等の地域競争力強化、地方移住の推進などを主な施策に挙げている。鹿児島は、薩摩藩の時代より形成された「麓」の名残が各地に残り、また、明治維新やその後の近代化に関連する史跡や建造物が数多く現存する。県内に点在するこれらの歴史的資源を連携して利活用することで、大きな地域活性

化効果が期待できる。鹿児島には異年齢の青少年がともに学ぶ薩摩藩伝統の「郷中教育」があるが、史跡や建造物等の歴史的資源を活用して、小中学生の子どもと大学生などの青年がともに学ぶ場を創出することも、地域活性化につながるであろう。

本稿は、始良市山田地域に現存する昭和初期の土木遺産である山田橋の解体撤去に際し、解体後の土木遺産の再利用による「小さな拠点」形成の一提案を実施するものである。始良市の山田地域は、少子高齢化が進む地域のひとつであるが、山田麓の面影が残る街並みや、明治の史跡である「山田の凱旋門」や「西郷どんの腰掛け石」、生徒数が減少するも創立 140 周年を迎えた歴史ある山田小学校、清流・山田川やホテルの里川・宇都川など自然豊かな河川、営農豊かな農村文化である田の神様の石像な

佐線）との結節点でもあり、県道 391 号は、山田地域と JR 帖佐駅を結んでいる（図-2 に示す青ライン）。このように、山田地域は広域道路ネットワークの中に位置付けられるが、この道路ネットワーク周辺には多くの歴史観光資源が点在している。蒲生は日本一の大クスや蒲生麓の武家屋敷通りがあり観光客に人気が高い。始良市中心部の別府川河口は、山田橋と同じく歴史的コンクリート橋であり土木学会選奨土木遺産である始良橋（昭和 7 年竣工）が架かり、加治木町は島津家が架橋した石橋の金山橋がある。鹿児島空港を挟み霧島市側には、国登録文化財である嘉例川駅がある。山田橋が架かる山田地域は、国登録文化財である山田の凱旋門など貴重な歴史観光資源があり、周辺に点在する上述の資源とネットワークを構築することで、大きな地域活性化効果が期待できる。



図-2 山田地域の周辺に点在する歴史観光資源

3. 山田橋の利活用による活性化潜在性

山田橋が架かる始良市の山田地域は、山田麓の面影が残り歴史文化が薫る地域である。山田麓のメインストリートであった新馬場通りは、山田橋と国登録有形民俗文化財である山田の凱旋門を結んでいる。山田の凱旋門は日露戦争従軍者の帰還を祝い山田村兵事会により明治 39 年に建造された歴史的価値の高い文化財であるが、山田橋の橋脚や高欄のアーチ形状は、山田の凱旋門のアーチと雰囲気を合わせるための工夫と考えられており、地域住民は山田橋と凱旋門を一体的に認識している。

山田の凱旋門から山田橋を渡り、西田の田の神様までつながるルート（図-3 に示す赤ライン）は、武家門や白壁、石堀が残る歴史情緒あふれる通りを通過するルートである。ルート途中には西南戦争の際に西郷隆盛が腰掛け休憩したと伝えられている西郷どんの腰掛け石（始良市指定史跡）や、歴史ある用水路など観光資源が多い。昨今、地域の歴史や自然を巡るフットパス観光が注目されているが、本ルートはフットパスにも適している。山田橋はこのルートの中心に位置し、自然豊かな山田川との結節点となっている。本ルートは、江戸期の農村文化である田の神様、江戸期の薩摩文化である麓景観、明治維新の三傑である西郷どんゆかりの腰掛け石、明治後期の日露戦争従軍者の凱旋を祝った山田の凱旋門、昭和初期の地域近代化を担った山田橋と、まさに山田地域の歴史を映すルートである。

山田橋は、瀬と淵をもつ自然豊かな山田川に架かり、橋上からは山田川の自然が一望できる。以前はカワセミが飛来するなど野鳥観察も期待でき、地域



図-3 山田地域に点在する活性化資源

の子どもにとっては貴重な環境学習の場となっている。山田橋は地域の近代化遺産であり、江戸期から明治期に連なる地域史を担う歴史教材のひとつでもある。山田橋の近くには山田小学校があり、山田橋は児童の通学路になっている。山田小学校は、明治に開校した歴史を持つ地域の中心施設であり、秋には地域の主要なイベントである山田の里かし祭りのメイン会場となる。

山田橋のような大正～昭和初期の橋は、地域の暮らしとともにあり日常の一部となっている。山田地域のお年寄りを対象とした筆者らの聴き取り調査により、既往文献には無い山田橋と地域の歴史的なつながりが明らかになった¹⁾。筆者らは聴き取り調査で得た山田橋と地域の歴史情報をもとに、子どもに分かりやすい紙芝居を制作し、始良市教育委員会の後援を得て山田小学校にて実演会を開催した(写真-1、図-4)²⁾。実演会には山田小学校の全校生徒66名の他、保護者、教員、地域のお年寄り、始良市観光ボランティアなど100名超が参加した。歴史紙芝居の実演会は、高齢化地域に残る土木遺産の歴史を地域の子どもと高齢者が共有する貴重な世代間交流の場となった。山田橋の新橋整備後も現在の山田橋の面影を残すことで、今後も同様の場を創出することができる。



写真-1 山田橋歴史紙芝居実演会の様子



図-4 山田橋歴史紙芝居の一部

4. 山田橋の再利用プラン

山田地域は、先述の通り歴史・観光・環境・福祉・教育の各面において、活性化に大きな可能性を秘めた地域である。安全性の改善に伴い現在の山田橋を解体・撤去せざるを得ない場合は、地域と深いつながりがある山田橋の構成部材を別の機能に再利用することで、大きな波及効果を得ることができる

だろう。橋の保存を望む要望に直接的に応えられなくとも、再利用により質の高い住民サービスの提供が可能であり、高い満足度の獲得が期待できる。

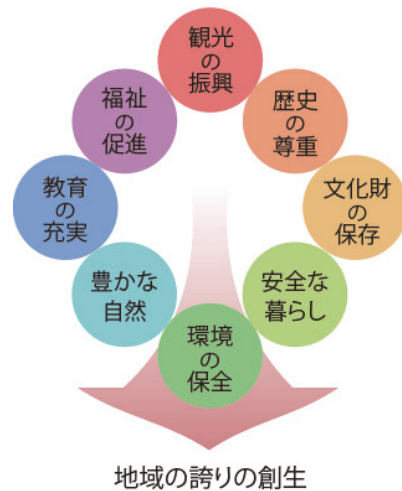


図-5 山田地域の誇りの創生イメージ

山田橋は、大正～昭和初期の橋梁にみられるアール・デコ調の造形が施された特徴的な高欄・親柱を有している。昭和4年に竣工し、87年間供用されている山田橋は、高齢者にとっては幼い頃からの人生の記憶の一部であり、子どもたちにとっては日々の通学で見る風景の一部となっている。このように地域の記憶や日常風景の一部である山田橋の高欄と親柱を、図-6に示す★1～★8の各位置にてベンチや公共オブジェとして展開・再利用することで、休憩施設としての機能だけでなく、地域の誇りの創生につながる等の波及効果が期待できる。★1～★8に示す位置は、山田の凱旋門、西郷どんの腰掛け石、山田麓の石堀の街路や山田川の水辺、山田小学校や公民館、西田の田の神様など、地域の観光・歴史・文化資源や地域住民の集会スペースが点在する位置であり、この位置に山田橋の高欄・親柱を再利用したベンチを整備することで山田地域の地域資源を面的につなぐことができる。このつながりの創出により、観光利用の促進や住民の日常利用の満足度向上が期待できる。山田小学校を会場とした地域イベントであるかかし祭りや、ホテル祭りの活性化にも寄与できるであろう。

鉄筋コンクリート造の高欄は、カット位置により、2人掛けの基本タイプ、4～5人掛けのロングタイプ、1人掛けのショートタイプなど多様なベンチタイプを制作できる(図-7)。コンクリート断面の中性化等、高欄カット面の経年劣化防止を目的とした断面塗装を、山田地域の子どもや高齢者が参加する塗装ワークショップとして実施することで、活性化や地域満足度の向上も期待できる。塗装面のデザインに



図-6 山田橋高欄・親柱の再利用プラン

カット位置により多様なタイプが制作可能

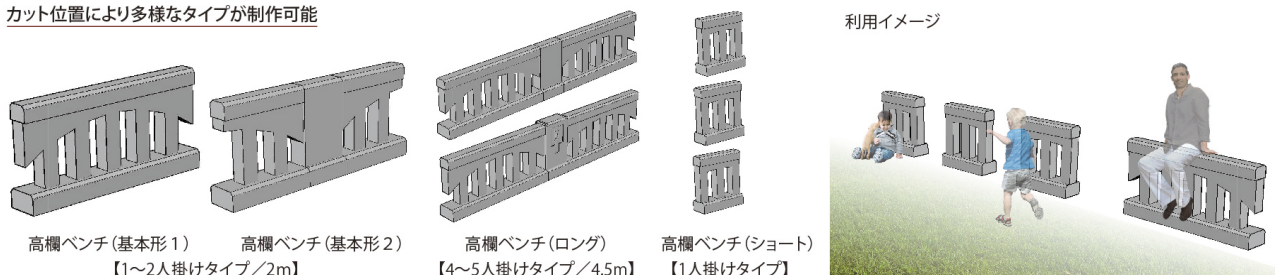


図-7 山田橋高欄のベンチ利用

アート性を付加することも可能であり、観光振興への寄与も期待できる(図-8)。

山田橋のような戦前の鉄筋コンクリート橋は、老朽化に伴い各地で解体撤去が進められているが、戦前の土木施設が残る地域は少子高齢化が進行する地域と重なることが多い。施設の供用期間が長く日常の一部となっている土木構造物は、本稿で提案した再利用により、世代間交流の場や地域が持つ豊かな自然や趣深い歴史資源に地域が気付き活用する契機をつくり、地域の誇りの創生につながる可能性を有している。地域の創生に資する土木遺産の利活用が望まれる。

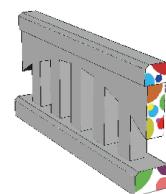


図-8 山田橋高欄のカット断面の塗装イメージ

参考文献

- 1) 拙稿：地域遺産オーラル・ヒストリー 鹿児島県始良郡の山田橋に関する調査報告ー，第一工業大学研究報告第27号，pp.23-26，2015.3.
- 2) 拙稿：土木遺産の利活用に向けた地域の記憶の共有化に関する試み，第一工業大学研究報告第28号，pp.61-68，2016.3.

